

自分が関わる記事で恐縮だが、10月から朝日小学生新聞（朝小）で「新井紀子先生のぐんぐんのびる読解力」という連載が始まった。対象を4年生以上と設定し、3年生までの既習事項や、4年生以上でつまづきそうな箇所をリストアップして、夏前から執筆準備を始めた。

朝小には、独自取材記事以外にも、本紙掲載の時事ニュースを小学生向けにリライトした記事が多数掲載される。「今週いっぱい猛暑が続く」の見出しで、記録的猛暑が8月後半も続く見込みであることを伝えた8月19日の記事もそのひとつだ。

記事の後に「高気圧」についての短い解説がついている。「周りと比べて気圧が高い部分です。空気が下がりながら圧縮され、雲がでにくく日射量も増えるため、夏は地上付近の温度が上がりやすくなります」

小学生の気持ちになって読んでみた。何度読んでも、「空気が下がりながら……」で始まる第2文の意味がわからない。この文には複数の読みがあり得る。

ひとつは「高気圧では、空気が下がりながら圧縮されるため、雲が出にくく日射量も増える」という読み方である。この解説では「高気圧では」が省略されたとするとらえ方だが、とすると、次の「夏は」との関連が不明だ。

もうひとつは、「夏は」までを修飾節と見る読み方だ。「夏は、空気が下がりながら圧縮され、雲がでにくく日射量も増えるため、地上付近の温度が上がりやすくなる」と同義になる。これでは「高気圧」との関連が不明だ。

ちなみに元の本紙の文章は「高気圧の中では、空気が下がりながら圧縮されて温度が上がる。雲が出にくいため日射量も増え、地上付近はさらに温度が上がりやすいという」だ。こちらの方が小学生にとっても読みやすい。

朝小に限らない。朝日、毎日、読売の3紙はどれも小学生や中高生向けの「やさしい新聞」を出している。私は毎日、そうしたメディアに目を通す。教科書や新聞から200字程度の文章を抜き出して、それが読めるかどうかを診断するリーディングスキルテスト（RST）を作問するためだ。

その際に思うのだが、「小学生に正確に伝わり得る文章か」ということを社内で検討している感じが感じられない。ルビをふり、「です、ます」調にして、イラストを豊富にすれば伝わるはず、という安易な思考停止に陥ってはいないか。

実は、RSTには総ルビをつける機能がある。複数の小中学校で、「ルビあり」「ルビなし」での正解率を比較してみた。驚くべきことに、ルビが小中学生の文書理解を助けるとはいえないとの結果が出た。むしろ、総ルビをふることで、かえって文書理解が妨げることすらある。

朝日新聞本紙はどうだろう。新聞は義務教育レベルで読めることを建前としている。しかし、自分の書いた記事が中高校生に読解可能かを日々意識している記者やデスクはいるの

だろうか。R S Tでも、中高校生の正答率が5割どころか3割を切る新聞出典の問題は珍しくない。

語彙が難しいからではない。普段から新聞を読みなれている人しか読めないような文章が多いのだ。

たとえば「新型コロナウイルスの流行期に限り、特例として初診から受けられるようになったオンライン診療について、厚生労働省は6日、4～6月の初診の実績を公表した。禁止されている麻薬や向精神薬が処方されたケースが88件あった」(朝日新聞8月7日夕刊)という記事。麻薬や向精神薬について禁じられているのは、①処方そのもの②オンライン診療での処方③オンライン診療の初診での処方——のどれなのか不明瞭だ。正解は③だが、この欄を担当するベテラン記者でさえ、①が正解だと思い込んだ。

オンライン診療の制約の緩和は、新型コロナウイルス感染症で外出が難しくなっているなか、持病に苦しんでいる人にとっては重大事。読み慣れた人だけが新聞の情報を必要としているのではない。字数の制約や締め切りを理由に、不明瞭な記事を書いて済ませるのは、読者に対して不誠実と言わねばなるまい。

「そこまで求められては記事など書けない」と言うなら、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の刊行物を一度読んでほしい。高校までの英語をしっかりと習得していれば、ネイティブでなくても辞書を使うことなく読めることに驚くだろう。にもかかわらず、その内容は世界に発信したい新しい概念に満ちている。仲間内だけでなく、本気ですべての人々にメッセージを伝えたいと思うとき、人はそのように言語を使うことができる。

私のネタ帳

終戦記念日の「ノモンハン 大戦の起点と終結点」を読んだ。満州とモンゴル人民共和国間の国境紛争から始まった日ソの軍事衝突に対して、気鋭の歴史研究者へのインタビューと徹底した現地取材を通じて、第二次「世界」大戦の起点という新しい視点から読み解く労作だ。ノモンハン事件を日本陸軍の暴走という苦い歴史として記憶している人は多い。無茶な作戦を立案、強行した辻政信への批判も多く目にする。しかし、それらはあくまで敗戦国日本の視点だ。終戦から 75 年。実体験として戦争を記憶する世代も減った。私たちには、「世界史の中のノモンハン」という新たな視点が必要だったのだ。戦争の記憶を風化させないためにも。